

經典延書と語彙

片岡了

31 (片岡)

平安時代に、仏典や漢籍に訓点の附された、いわゆる訓点資料が多量に存在することは周知の事実であるが、鎌倉時代以後になると、仏典を漢字仮名交り文に訓み下した、いわゆる仮名書き經典が現われるようになる。この仮名書き經典は、平安時代の例は現在のところ知られておらず、鎌倉時代以後のものに限られる。そして、その經典そのものも一定のものにかたよっている。それは『妙法蓮華經』と、浄土教系の經典である。特殊なものとしては、天理図書館蔵の『釈迦如来念誦次第』のごときものがあるが、これはいわゆる「經」ではない。「經」としては、右にあげた『妙法蓮華經』と浄土教系經典に限られるようである。

ひるがえって考えれば、法華經にせよ、浄土經典にせよ、それが上代から読誦せられて来たことは、改めて言う迄も

ないことである。しかし例えば、『法華經』についていえば、それが平安朝の仮名文学などの中に現われている例からすれば、日常的には、いわゆる訓み下し文にして読まれていたのではなく、原漢文のまま、読誦せられていたようである。浄土經典の場合もそれは同様であったようで、寺院の中などで、学問の対象とするような場合以外は、たとえば、『阿弥陀經』を原漢文のまま読誦していたようである^②。しかるに、それが鎌倉時代になると、先述の如く、それらの訓み下し文にしたもの(延書經典)が現われてくるようになる。その理由、あるいは目的は、如何なる点にあったであろうか。

それは一つには、教化活動ということに端を発しているであろうと思われるが、かりにそうであるとしても、その

教化活動というのはどのような内容のものであろうか。それをもって、直接的に婦女子によませるという形で啓蒙活動ということとして見るならば、少し問題がありそうである。というのは、それにしては、その延べ書きされた本文自体が決して平易ではないし、また遺存するそれら仮名書經典の数が少なすぎはしないであらうか。尤も、それらは実は多数あったものが、漢文書きのそれにくらべて一段低く位置づけられたかして、大切に扱われず、散佚してしまったというような事情があるのかも知れない。しかし、いま『法華經』はしばらく措くとして、浄土經典について見るならば、『真宗聖經現存目錄』などによっても、鎌倉・室町期のものと確定できるものはほとんど発見できないのである。

したがって、これはやはり、一般的な教化活動というようなことは別の事情が存したと見る方が当たっているように思われる。

後に記すように、現存するものを検討して行くと、そこにはそれなりに一定の系譜がたどられるのであって、一定の教学上の伝統を承けついでるように認められる。浄土經典の平安時代の訓点資料は現在知られておらず、鎌倉以後でもそれは同じで、そこに仮名書き浄土經典が現われる

のである。それは、平安朝以来の伝統である加点による方法に代って、直接訓み下した形のものがうけつがれて行ったものではなからうか。そして、このようにして訓み下された經典が、僧侶の口を介して、信徒の耳に達したであろうと考えられる。そこには、浄土真宗の場合でいえば、例えば、蓮如上人の『御文』にその一例を見得るように、その訓み下された經典の中の特定の文や句が、そこに引用され、それが人々の耳に達するようになって行ったもの^③と考えることができる。

その時、それ迄は僧侶の中にとどまっていた、經典の中の一定の語句が、広く一般の信徒の生活の中にも入りこんだであらう。即ち、それ迄のように、個々の具体的な文意を理解するに至らぬままに音読されていたものが、不十分ではあっても、いま少しくだいたかたちで、個々の語のレベルまで具体化された状態で人々の生活の中に入ってきたと考えられる。そこに、仏典出自の語の日常語化、通俗化というべき現象が生じて来たと思像されるのである。

そこで、小稿では、系統が異なると見られる二種類の延べ書き經典を例として、仏典出自語の通俗化・一般化の問題について考えてみようと思う。

ここでとりあげようとするのは、次の二つの延べ書き本である。

①『仏説阿弥陀經』延書 伝存覚筆本

②『仏説阿弥陀經』延書 正平十五年本

この二者は、同一經典の延べ書きであるが、後に例示するように、その訓み下し方に相違があり、また、字音の振り仮名にも、特徴的な点で相違がある。したがって、この二者は相近い関係にはありながらも、なお相互に異なる学統をひくものと見なされる。

①はもと常州大綱の願入寺に伝存したもので、それが浅野長量氏の蔵に歸し、浅野氏から大谷大学図書館に寄贈せられたものである。全体の現況は、『大無量壽經』(上末・下本・下末の二卷三冊)、『觀無量壽經』(本・末の二卷二冊)、『阿弥陀經』(二卷一冊。但し、表紙に「四紙弥陀經」と記す。「四紙弥陀經」とは、「仏説阿弥陀經」がもと、紙四枚に印刷せられたことに起因する称である)^④の五卷六冊から成っている。そのうち『大無量壽經』下本一冊は他の五冊とは別筆で、これは、光遠院恵空の自筆本である。これ以外の五冊は全て同一筆で、各冊粘葉装、五冊とも識語の類

は一切存しない。五冊とも、表紙左下隅に、本文とは別筆で、「釈了源」の袖書がある。箱の蓋の表に「常樂台存覚上人御筆 御經延書 五卷」と記され、箱の身の中側に「常州鹿嶋郡水戸磐船山 大綱 願入寺 如願」の記がある。

右について、願入寺に伝わったのは、その箱書に記すように、五卷であり、それは、『大無量壽經』下本以外の五卷五冊をさす。そのことは後述する恵閑本の識語からも推定される。『大無量壽經』下本一冊は、その巻末に添えられた、浅野長量氏の添書によれば、願入寺伝存の本とは別途に、佐々木求己氏から浅野氏がゆずられた本で、補充したものである。

さて、その『大經』下本一冊以外の五冊について見ると、先述の如く、識語の類は一切存しないから、誰の手になるものであるかは、内部からは決し難い。ここではひとまず伝存覚筆としておくこととする。この書を伝持した願入寺は、親鸞聖人の孫である如信上人の建立したところであり、如願は『諸家分脈系図』^⑦によれば、願入寺第十八代性兼がそれで、次の如く記されている。「性兼 願入寺慈航院如願童名安丸 光性僧正猶子 儀同連枝 十五歳得度 同年七月巡讀 同八年三月導師 宝曆六八月廿四日卒 六十五」。

江戸初期の人である。

また袖書にある「了源」は、存覚筆という伝との関係からするならば、仏光寺教団を築いた空性房了源を擬するのが妥当であろう。空性房了源は、『親鸞聖人門弟交名牒』によれば、「関東甘繩了円弟子」と記される人で、永仁三年生、建武三年（二三六年）歿。甘繩了円に教えをうけ、のちに上洛して、親鸞聖人の曾孫で本願寺第三世覚如を訪ね、覚如の長子存覚の指導を受けた。了源はこの五冊の所持者と考えられる。

また筆者として伝えられる存覚は正応三年（一二九〇）生れ、応安六年（一二七三）歿。嘉元元年（一一三〇）東大寺で出家受戒し、父覚如に従い教化活動を助けたが、のち義絶せられ諸地に滞留、晩年は京都常楽台に住した。東国門徒から支持せられた。

さらに、この五冊については、次の記述が考えあわされる。大谷大学図書館に蔵せられる三部経の延書本に、天明八年書写の奥書をもつ本がある。それは、『無量寿経』上・下二冊、『観無量寿経』一冊、『阿弥陀経』一冊の四帖一具のもので、袋綴の本である。『観無量寿経』と『阿弥陀経』の各巻末に、「五楽之印」と「恵閑」という黒印が捺され、『阿弥陀経』の巻末に次の識語がある。まず第十一丁

ウラに、

「本云

右三部経展書七卷 内五卷常州磐舟願入寺所持 上

ノ本ト下ノ本ト二卷同額田阿弥陀寺安置各存覚上人ノ御真筆也」

とあり、第十二丁オモテに、

「三経御延書之御本七卷合綴四冊 予從志学始深ク求ルニ

未タレ獲 空及ニ老昧一 幸哉今得レ之 故ニ歆喜渴仰而書

写者也

天明八戊申龍集春三月日

浅井郡北池 浄泉寺恵閑七十歳

とある。この二つの識語のうち、前者は、「本云」とあるから、この恵閑写本の親本の原識語と認められる。そして、後者に、「三経御延書之御本七卷合綴四冊」といっているのは、その親本の体裁をいうものと考えられるが、そこに、「七卷合綴四冊」とあるから、その親本は、願入寺にあった五巻と、阿弥陀寺にあった二巻とをそれぞれに書写してまとめた写本で、それを四冊に合綴した形をしていたものと推定せられる。そして、今この恵閑の写本も、その体裁を襲ったものと見られる。即ちこの恵閑写本は、その『無量寿経』上本・下本の部分以外は、願入寺本の孫写本の位置に立つ

ものと認められる。

いま『阿弥陀経』の部分について、この両者を対比すると、延べ下した本文は全く一致する。但し、願入寺本は総振仮名附であるが惠閑本はほとんど振仮名がない。所々に存する振仮名は、次の三ヶ所以外、全て願入寺本のそれと一致する。その、ことなる三ヶ所は、「阿菟楼駄」の「ロ」(願入寺本は「ル」)、「天ノ楽」の「ラク」(願入寺本は「カク」)、「宿王仏」の「シフ」(願入寺本は「シュク」)の三ヶ所である。その他は全て一致する。ただ、表題が、願入寺本は「四紙弥陀経」とするのを、惠閑本は「阿弥陀経」とする。それはいずれの段階でなされたか不明である。

さて、右の惠閑本の識語にいう「内五卷常州磐舟願入寺所持」というのは、現存の願入寺本の五卷五冊であることと符合し、また、願入寺本箱書の如願の記にいう「五卷」ということも符合する。また、願入寺本に欠けているのが、『大経』の「上ノ本」と「下ノ本」の二巻であるということも、惠閑識語の「上ノ本ト下ノ本ト」(卷同阿弥陀寺安置、即ち、願入寺には「上ノ本ト下ノ本ト二巻」が欠けていると解されることもとも符合する。

このように見て来ると、願入寺本が存覚筆であるということはかなり早くからそう信じられて来たことがうかがわ

れる。字体・紙質などはその頃のものと思はれる。ここでは一まず、慎重を期して、伝存覚筆としておく。

次に、②は筆者不明の本であるが、巻末に

「正平十五年九月十四日」

の識語があり、その右横下に「今□」と読める(□は「西」の字かと考えられる)人名らしいものがある。但しこれは本文とは別筆と認められる。なお、右の識語の年月日の記し方に少し不審が残る。文字・墨色は本文と同筆と認められるが、その日付が、「十」と「四」とが、斜め横に並んだ形で記されている。その点に強く疑をはさめば、あるいはこの本は、正平十五年(一三六〇)の本の写しかとも考えられる。表紙は淡色で、左端に

「仏説阿弥陀経 一卷」

という外題と、所持者名らしい「釈妙□」(□は「玄」か)の記が、本文とは別筆で紙に直に記されている。但し、極めてうすくなっている。また巻末の前記の識語の左下に禿庵文庫^①の旧蔵たることを示す「禿庵」の篆書の角印が捺されている。

この本は、字音の開合、和語のオ列長音の開合はほぼ誤りなく表記せられており、四つ仮名の別もほぼ正しく表記せられている。ただ、「香祇議」の諸例で、直音を合拗

音に表記し(「香」^{ノフウ}は「カウ」の「カ」を「クワ」としたものの)、「華」^{ノハナ}で、「エ」を「エ」に誤っている。また、和語の仮名づかいで、ア・ハ・ワ行の相互の混乱例が多い。

これらの事例からするならば、この本がかりに正平十五年の原本の後写の本であるとしても、原本の姿をそうひどくそこねているとは考えなくてもよいように思われる。

二

いま願入寺本と正平本との訓み下し方を比較すると、両者の間にはかなりの相違が存する。その中、文意そのものに差異が生ずると考えられる相違は次の如くである。正平本の丁付によって所在を示す。上段が正平本、下段が願入寺本の本文である。(必要箇所以外は振仮名を略す)

○(十二オ4) 「阿弥陀仏ノ

名号ヲ執持スベシトトク

ヲキヒテ

「阿弥陀仏ヲトクヲキキテ
名号ヲ執持スルコト」

○(十三オ2) 「阿弥陀仏ノ

極楽国土ニ往生スルコト

ヲウレハナリ」

「阿弥陀仏ノ極楽国土ニ往
生スルコトヲエン」

○(十三ウ2) 「ワカコトク

イマハ阿弥陀仏ノ不可思議ノ功德ヲ讃歎ス」

○(十四オ4) 「ナンチラ衆

生マサニコノ称讃スル不可思議ノ功德ヲ信スヘシ

一切諸仏ニ護念セラル、
經ナリ」

「これと同じ例が他に十五オ5、十六オ5、十七オ5、十八オ4、十九ウ1、の五ヶ所ある」

○(二十一ウ5) 「ワカコトク

クイマハ諸仏ノ不可思議ノ功德ヲ称讃ス」

○(二十二オ4) 「釈迦牟尼

仏ヨク甚難希有ノ事ノタメニヨク娑婆国土……ノ

「ワカイマ阿弥陀仏ノ不可思議ノ功德ヲ讃歎スルカトク」

「ナンチラ衆生マサニコノ不可思議ノ功德ヲ称讃スル一切諸仏ニ護念セラル、經ヲ信スヘシ」

「ワカイマ諸仏ノ不可思議ノ功德ヲ称讃スルカトク」

「釈迦牟尼仏ヨク甚難希有ノ事ヲナシテヨク娑婆国土ノ……ナカニシテ」

ナカニシテ」

○(二十二ウ3) 「ヨク娑婆

国土……ノナカニシテ阿
耨多羅三藐三菩提ヲエタ
シカハモロモロノ衆生ノ
タメニコノ一切世間ニ信
シカタキ法ヲトキタマフ
ナリ」

○(二十三オ4) 「ワレ五濁

惡世ニシテコノカタキコ
トラ行シテ阿耨多羅三藐
三菩提ヲエンタシカハ一
切世間ノタメニコノ信シ
カタキ法ヲトクナリ」

「ヨク娑婆国土ノ……ノナ
カニシテ阿耨多羅三藐三菩
提ヲエテモロノ衆生ノ
タメニコノ一切世間ニ信シ
カタキ法ヲトキタマフ」

「ワレ五濁惡世ニシテコノ
難事ヲ行シテ阿耨多羅三藐
三菩提ヲエテ一切世間ノタ
メニコノ難信ノ法ヲトク」

右の通りである。これを相互に対比してみると、両者の間には明らかに訓法の上の差違が存在する。それは文意の上の差をもたらし、そのことは、教理の解釈の差を生み出す。したがって、両者は、同じ浄土教の中ではあるが、そ

れぞれに異なった学統のよみ方を承けていると考えられる。本文の訓み下し方の上から右のように考えられるばかりでなく、その他にも、留意すべき点がある。それは「阿」字の振仮名の問題である。わずかに一字の字音仮名の表記のことであるから、瑣末な事象のようにも映るが、決して軽視できない、特徴的な現象なのである。

「阿」字は經典の中にしばしば現れる。『阿弥陀經』の中でいえば、「阿弥陀仏・阿羅漢・阿難陀・阿菟楼駄・阿逸多・阿僧祇劫・阿鞞跋致・阿閼鞞仏・阿耨多羅・阿修羅」などが、幾度もくり返し現われる。その「阿」字に対し、願入寺本は、二通りの表記の振仮名を附している。「阿弥陀(仏)」の「阿」以外の所では「ア」で表記し、「阿弥陀(仏)」の時はすべて「ワア」と振仮名を附している。それに対し、正平本はすべての「阿」字に区別なく「ア」と振仮名を附している。そのことだけをとらえると、単に両者の個人的な差として解されて終るのであるが、これを「阿」字の振仮名の前代からの伝承の問題として見る時、それではすまない点がある。一般に「阿」字の字音仮名表記は、「ア」である。それを「ワア」とするのは、親鸞聖人が最初である。それ以前に同例は発見できない。前後の時代の二三の例をあげれば、『類聚名義抄』観智院本は、

「阿 於何メ……和ア」(和訓等は省略)

『法華經音義』

「阿^ア 有何^{ウツカ}反」(明寛三蔵流)

「ア 阿」(永和四年本)

『字鏡集』(寛元本)

「阿^ア

のごとくである。親鸞聖人の例以前にこの「ワア」表記例は見出せないのである。親鸞聖人自身は「阿」に「ア・ワ・ワア」の三通りの仮名をあてているが、「ア・ワ」は数例にとどまり、大部分「ワア」である。つまり、「ワア」という表記は親鸞聖人の特徴的な表記である。それ以後の時代にあっても、親鸞聖人の学統を継ぐ人々の表記の中には認められるが、それ以外には一般に見見できない。結果として、親鸞聖人の表記がその法統をうける人々の中にもうけつがれて行っていることになる。それ以外には広がらなかったようである。

さていま、願入寺本の表記をみると、それが「ワア」・「ア」二通りである。それは、「阿弥陀仏」以外の所では、「阿」字の仮名の一般のあり方に従って「ア」としたが、「阿弥陀仏」の場合だけは、「阿弥陀仏」に対する格別の意識によって、親鸞聖人の表記の伝統を尊重してそれに従っ

たことによるものと考えられるのである。一方、正平本は全て区別なしに「ア」とする。その点、願入寺本とはことになった伝承の上にあることになる。

このように、願入寺本と正平本とはそのうけついでいる学統がことなると考えられるが、ここでは、その同一経典のこととなった学統によることとなった延べ下し文を対比して、そこから、仏典を出自とする漢語語彙の問題について考えてみようと思う。

三

例えば、原漢文

「汝勿謂此鳥實是罪報所生」

を訓じて、正平本は、

「ナンチコノトリハ実ニコレ罪報ノ所生ナリトヲモフコトナカレ」(ハオI。振仮名省略。)

とし、同じ部分を、願入寺本は、

「ナンチコノトリハ実^{シチ}ニコレ罪報ノ所生ナリトオモフコトナカレ」

とする。前者が「マコトニ」と和語にしている所を、後者は「実^{シチ}ニ」と字音語にしている。

この語は今一所あって、「何況有^{シチ}実^{シチ}是諸衆鳥」を、正平

本は、

「イカニイハンヤシチニアランヤコノモロ」ノ衆鳥ハ
……」(八オ五)

とし、願入寺本は、

「イカニイハンヤ^{シチ}実ニコノモロ」ノ衆鳥アランヤ

とする。この場合、両者近似しているが、厳密には、前者が「シチニ」と仮名表記の語形にしているところを、後者は、「実^{シチ}ニ」と漢字表記の語形にしている点に相違がある。

ここにおいて、まず意味の面で、「マコトニ」と「実^{シチ}ニ」(「シチニ」も含めて)とが近似した、あるいは、かさなり得る内容の語であったことが知られる。これは十四世紀後半の例であるが、これより二百数十年後の『日葡辞書』(一六〇三刊)に、

≡jit macoto 真実≡

≡jitni ほんとうに≡

と記しているが、十四世紀頃にも同様の内容であったらしいことが知られる。

また、正平本の「シチニ」という仮名の語形についていえば、正平本では、^シ字音語を仮名表記している例が多い。

「タウニ(当ニ)、カフス(号ス)、レンケ(蓮華)、カク(衆)、イチニチ、ニ、チ……シチニチ(一日、二日、……

七日)、コクト(国土)」のごとくである。ところが、一方

で、正平本は、願入寺本が「他方ノ十万億ノ仏」というように意味の単位ごとに割って延べ下している所を、「他方十万億仏」としたり、願入寺本「飯食シ経行ス」を正平本「飯食経行ス」とするように、原漢文を語のレベルまで切らずに、いわば句の形で、ということとは、もとの漢文をいわば生のまま移していることが所々にある。そういう文脈の中において見る時、右の和語や、字音の仮名表記形の語は、意識的にそうしていることになる。片方に原漢文の句がそのまま入りこんで来ていることによって、逆に一方の仮名表記形が持つ表記上の効果(あるいは価値)は強められるわけであって、正平本は、部分的にはかなり長い原漢文の句をもちながらも、全体としては、やわらげた本文にしようとしていると考えられる。

ここで、正平本と願入寺本の、和語・字音語(漢字表記)の対応を比較してみると、次の通りである。

(上段が正平本、下段が願入寺本。必要以外振仮名は略)

④ 正平本が和語で願入寺本が字音語のもの。

(七ウ五) ナンチコノトリマ ナンチコノトリハ実ニコレ

コトニコレ

(九オ五) 心ヲナス

心ヲ生ス

(九ウ5) サエサフルトコロ
ナシ
(十二ウ3) ソノヒトイノチ
ヲハル
(十二ウ4) アラハレテ
(十三オ1) コ、ロ顛倒
(十三オ4) コノコトハラ
(十四オ4) 誠実ノコトハ
「この例は他に五回ある」
(二十オ2) コノ諸仏ノトキ
タマフトコロヲヨヒ經ノ名
(二十ウ3) 諸仏ノトキタマ
フトコロヲ
(二十ウ3) 諸仏ノトキタマ
フトコロヲウケ信スヘシ
(二十一オ2) 阿弥陀ノクニ
(二十二オ3) 称説シテシカ
モコノコトハラナサク
(二十三オ2) コノカタキコ
トラ
(二十三オ5) コノ信シカタ

障礙スルトコロナシ
ソノヒト命終
現シテ
心顛倒
コノ言ヲ
誠実ノ言
コノ諸仏ノ所説ノ名ヲヨヒ
經ノ名
諸仏ノ所説ヲ
諸仏ノ所説ヲ信受スヘシ
阿弥陀仏國
称説シテコノ言ヲナサク
コノ難事ヲ
コノ難信ノ法ヲトク

キ法ヲトク
(二十三ウ4) 仏ノトキタマ
フトコロヲキ、テ
右の二十例がある。同語を整理すると、十一語である。「マ
コト、ナス、サエサフル、イノチヲハル、アラハレ、コ、
ロ、コトハ、トキタマフトコロ、ウケ(信ス)、カタキコト
(信シ)カタキ」と「実ニ、生ス、障礙ス、命終ス現シ、
心、言、所説、信受、難事、難信」との対応になる。
一方、これに対し、その逆もある。
⑧ 正平本が字音語で願入寺本が和語のもの
(一オ3) 一時(「ヒトトキ」
の左訓あり。)
(二オ4) 諸大弟子(モロノ
ノテシの左訓)
(三オ5) イマ現在ニ説法シ
タマフ
(三ウ1) 説法シタマフ
(八ウ3) 変化シタマヘル所
作ナリ
(八ウ4) 宝行樹(タカラヲ、
コナフウエキの左訓)
仏ノ所説ヲキ、タマヘテ
モロノ大弟子
イマ現ニマシノテ法ヲト
キタマフ
法ヲトキタマフ
変化シテナシタマフトコロ
ナリ
タカラノ行樹

(ハウ4) 宝羅網^{ホウラマウ}(タカラノウ
スキアミの左訓)

(九ウ5) 十方国^{シツハウコク}

(十オ5) 成仏己来^{シヤクブチキライ}(已来にコ
ノカタの左訓)

(十一オ2) 生スルモノハ^{シヤウ}

(十一ウ) 発願シテ^{ハツクワン}

(十一ウ) 生セン^{シヤウ}

(十二オ2) 生スルコト

(十三オ3) 発願シテ^{ハツクワン}(クワン
ヲ、コシテの左訓)

(二十ウ1) 不退転

(二十一オ2) 生セン^{シヤウ}

などの十六例である。整理すると、「一時、現在ニ、説法シ、所作、国、已来、生スル、発願シ」などの実詞としての語、「諸、宝、不」などの接頭語的な語を結合させたままの形など十一例ほどである。これが願入寺本では「ヒト、キ、(現ニ)マシ／＼テ、(法ヲ)トキ、ナシタマフトコロ、クニ、ヨリコノカタ、ムマル」・「モロ／＼ノ、タカラノ、(退転セ)ザル」となっている。

この㉔・㉕に対し、それとはことになって、両本ともに字

タカラノ羅網^{タカラノ}

十方ノクニ^{シツハウ}

成仏ヨリコノカタ^{シヤクブチ}

ムマルルモノハ^{クワン}

願ヲオコシテ

ムマレン

ムマルルコト

願ヲオコシ

退転セサルコト

ムマレン

音語にする語、両本がともに和語にしている語をみると、両本とも字音語にしているのは、仏名・菩薩名・人名・地名とか、一定の教理を背景とした語(三悪趣・菩提・八聖道・罪報・阿僧祇劫、阿鞞跋致のごとき)とか、あるいは、「東方」・「西方」のように日常的な語ではあるが、經典の中で特定の内容をもっておかれている語であったり、逆に、「世界」・「楼閣」などのように、古くから和文の中でも慣用されている語である。和語にしているのは、助詞・助動詞の類は論外として、基礎的な動詞・接続詞の類で、いずれも基本的な日常語である。

それらに比すると、右の㉔・㉕に属して、両本で処理のしかたにちがいのある語は、「実ニ」のように、中古から例のある(宇津保物語に「じちにおぼしてとどめらるべく」絵索引本文篇一〇四五ページ10行などの例がある)ものもあるが、大体は、当時まだ、和文脈の中では、日常的な語として成熟していなかった語であるように思われる。当時、仏教関係の文献、或は非常に仏教色の強い仏教説話集のようなものを除くと、和文の文学作品などの中には余り登場して来ない語であるように思われる。一例として、和漢混交文の上々のものと評された『平家物語』を調査してみると、先の諸語において、「現ず」は十一例あるが、「命終ス、

心^{シン}、所説、信受、難事、難信、所作、現在ニ、已来^{イライ}」など
は見あたらず、「生ズ、一時」は一例ずつ、「言^{ゴン}」は用いら
れない(「言^{ゴン}」は二例ある)、「障礙」二例、「説法」三例、
「発願」一例があるがいずれも動詞ではなく名詞である。
『平家物語』に、仏教語が多数あることは言うをまたない
ことであり、「発心、菩提心、信心、信仰」などは発見で
きるのであるが、㉔・㉕の語については右の通りである。
また「命終」はないが「死ぬ」や「臨終」は多数例ある。
一作品をとりあげただけで、多くを云為することはできな
いが、その一斑はうかがい得るであろう。

かように、㉔・㉕で見た字音語は、当時、和文脈の中の
語としては広く用法が定着していない語であったと考えら
れる。それが、両延べ書き本のそれぞれにおける扱いに相
違を生じた一つの原因であろうと思われるのである。

それが、この後二百数十年たつと、『日葡辞書』の中に収
載せられるに至る。

Xōji, zuru 生まれる、生ずる、あるいは発生する

Xōgue Sauari, ru 障害または邪魔

[Xōgue no nasu 障害になるあるいは阻止するまたは

邪魔をする]

Miōju または Meiju 命の終わり

Xin Cocoro に同じ。心。また、禪宗僧の説く Xin で、
霊的実体のようなもの

Xoxet ある人が言ったり、説教したりしたこと。

例 Xoxet no gotoqu 言ったとおり、あるいは説いた

ように、文書語

Xinju Macotoni vquru 信ずること

例 xinjusuru

Nanxin すなわち xinjigataxi 信することのむずかしい

こと

Nanji catagiototo 危険な事または困難なこと

Irai これから先、また今まで、あるいは従来、

例 Yoxoyori irai 子どもの時分から今に至るまで、

Xeppo Norino toqu 教法や教義を説くこと

Xosa Nasu tocoro しむ

などの如くである。これらの語が、どれだけの広さをもっ
て用いられていたのかは明らかではないが、Xin や Nanji
や Irai などの語義の説明を見ると、先の仏典における意
味からはかなりはなれて来ているから、用いられる場もそ
れだけの広さをもったであろうことは考えられる。但し、
中には Xoxet のように、「文書語」という注記のあるもの
もある。意味の変化という点でいえば、

Futai Xirizocazu すなわち Itquno いづまづもあること
例 Futaino inochi 永遠の生命

のような例は、原義からはかなりへだたっている。Futaiは「不退」であろうから、こういう語が仏典以外から来るとは考えにくく、「不退転」の省略形としての「不退」にもとづくであろう。不退は梵語 a-vinivartaniya の訳で、「悪趣に退墮せぬこと」、「証った菩薩の地位から退失しないこと」である。それから見るとかなり転義している。また、

Ichiji Fitotqunotoqi ひと時 例 Ichiji feximo va-surenu 私はほんのちよつとの間も忘れない

などは、必ずしも仏典出自語とは言いくいかとも思われるが、しかしおそらくは仏典から出たと見る方が真に近いであろうが、そうだとすると、これも「或る時」の意味の原義からはかなりはなれている。

『日葡辞書』はよく知られているように、特に仏教色の強い語は収めない方針である。

「仏法の語には Bup (仏法語) と注する。ただし、仏法語の多くは難解で、用いられることも少なく、特定の教義または宗派独特の専門用語の類なので、収載するのを見合わせた」(序言四〇五ページ)^④

と自らことわっている。しかるにいま右に見た諸語には

Bup の注記がない。ということはこれらの語がすでに仏法語としては意識されなかったわけであり、この場合の例の範囲でいえば、十四世紀ごろまだ和文脈中の語としては熟さず、定着していなかった語が、十七世紀になる迄に、仏典から抜け出して日常語化して行ったことを示している。

註

① 築島裕博士は「漢文訓読の結果を書下しにした文」について、「生憎これらは何れも鎌倉時代又はそれ以後の写本であって、平安時代に写されたものは未だ管見に入らない」と述べておられる。『平安時代の漢文訓読語につきての研究』一〇一頁

② 石田茂作博士『写経より見たる奈良朝仏教の研究』(東洋文庫論叢11) 一六七頁によれば、奈良朝において「浄土経は無量寿経をその学的研究の対象とし、阿弥陀経をその実際の運用として書写読誦してゐた」と言われる。この「読誦」というのは音読することであろう。

③ 蓮如上人は『蓮如上人御一代聞書』によれば、「蓮如上人、堺ノ御坊ニ御座ノ時、……御堂ニライテ卓ノ上ニ御文ヲラカセラレテ、一人二人乃至五人十人、参ラレ候人々ニ対シ、御文ヲ読マセラレ候。云々」と記されている。(日本思想大系 本一六二頁)

④ 藤堂祐範『浄土教版の研究』(四〇頁)に「四紙経と称するが、それは紙四枚に摺写するから」と記している。『蓮如上

人行実』所収「本願寺作法之次第」(二一八頁)にも「小經は四紙弥陀經と也」とある。願入寺本が「四紙弥陀經」と表記しているのは、これらの伝承のもとになる事実である。

- ⑤ 恵空は享保六年卒。『阿弥陀經義要』などの著作があり、数多い写本を残した。

- ⑥ 辻善之助『日本仏教史』中世篇(一)四三三頁。『大谷嫡流実記』二九頁など。

- ⑦ 『統真宗大系』第十六卷所収。

- ⑧ 山田文昭編『三本対照親鸞聖人門弟交名牒』(大正六年十二月刊)による。

- ⑨ 『真宗辞典』参照。

- ⑩ 同註⑨

- ⑪ 禿庵文庫とは、大谷大学第十三代学長大谷肇誠氏の旧蔵書を一括したもの。『日本文庫めぐり』(出版ニュース社)一七二頁参照のこと。

- ⑫ 拙稿『仏説阿弥陀經』の国語史的研究」参照いただければ幸である。(神田喜一郎博士追悼記念論集 所収)

- ⑬ 邦訳本『日葡辞書』(岩波書店刊)による。文中の『日葡辞書』の記述は全てこれによる。